

風の輪

支援実践から見えてきたもの — 伝える使命



淡路こども園 初期のころの園庭

「現場に出なさい。子どもと関わり、お母さん方の話をじっくり聞きなさい」：私がこの38年間にわたり障がい者福祉に携わるきっかけになった恩師のことばです。

昭和53年5月、風の子保育園の障がい児保育の実践と検討から、発達支援（療育）と家族支援を柱にした「淡路こども園」が開園しました。当時大学院で発達心理学を学んでいた私は、中島誠（京都大学教授）、名倉啓太郎（大阪樟蔭女子大学教授）の両先生からの助言で心理相談員とし

て現場に入りました。

さっそく貴重な体験が：翌年、相談で担当した男児が夏休み家で荒れ、保育園横の古家（現アイ・サポート研究所）に一夏泊まり込んで緊急援助。また琵琶湖「セツルの家」の宿泊行事では、夜中寝つけない子をおぶって浜を何度も行き来、寄せては返す波音に包まれて浜辺で親御さんたちの話に耳を傾け、家族のご苦労と思いに心が揺さぶられました。

当時、こども園には「実践から学ぼう」と、同僚の大学院生が何人もやってきました（今はみな大学で心理学を教えています）。松村昌子園長は、心理学の知識は多少あっても子育て経験のない未熟な私たちに、保育の機会を与えてくださいました。走り回る子、こだわる子、かんしゃくの激しい子。そして、わが子

姫島こども園 園長 岩崎隆彦
昭和53年5月平成22年 淡路こども園
（平成4年から園長職）

を必死に追いかけるお母さんや、わが子の訴えを受け止めきれないお母さん。そして、きょうだい同伴で目一杯のお母さん等々：こうした親子の現実を目の当たりにして、私は「これではとても太刀打ちできない。一から勉強だ」と覚悟を決めました。

「子どもから必要とされる存在になりなさい」と松村園長から教えを受け、その目標をめざして関わりを重ねました。日々新たな経験・発見・見直しの連続でした。園に入らない子との「外回り」が続きました。人の目の厳しさ・



みんなでクッキング(平成4年ごろ)

優しさ。お母さん方の苦勞を身をもって体験。子育てには第三者に見えない課題がいっぱいあること、極端な行動やわかりにくい表現には必ず子どもの心が反映されることがわかってきました。

教育でも福祉でも、「集団生活への適応」と「自立に向けた指導訓練」があたりまえだった時代、「本人の意思尊重が何より大切」と訴える私たちは少数派でした。意思の軽視によって多くの子どもや家族が被った深い心の傷を思うにつけ、自らの力不足を痛感すると共に、支援者としての責任と使命をはっきり自覚しました。

「どんな行動にも意味がある」「行動障がいはつくられる」「どの人も理解者を求めている」：これらはすべて、本人・家族との出会いから得られた私たちの確信です。その大切な知識を発信するため、平成15年法人のアイ・サポート研究所が設立されました。